

火星の美女検査官エスノの前に、天井から一人の全裸の美女が降り立った。エスノと、ほぼ同じ身長なので流太郎にはエスノが見えなくなり、全裸の金髪の美人を見てしまうのだ。

白い肌、豊かな胸、体の中心にある金色の恥毛の下には縦のスジ、が、ありありと流太郎には見えた。女神のようだが、生身の人間で、しかも彼女は微笑を浮かべて流太郎に近づいてきた。

流太郎は抵抗できずに立ったまま、自分の男の肉筒も天井に向けてしまったのである。

エスノは、うっとりとして流太郎の突起したものを見て、

「合格よ。その女性は天井から投射された映像なのね。」

と解説すると、パネルのスイッチをひねる。

すると、すぐに流太郎の目の前の金髪の全裸美女は幻のように消えてしまった。

それでも流太郎の勃起状態は持続していた。エスノは備え付けのマイクに向かって、

「メレニさん、お入りください。」

と呼びかける。

ドアが開いてメレニが入ってきて、流太郎の全裸、および
元気横溢した股間の男の棒を眺めると、

「まあっ、素敵だわっ。」

と火星語で思わず叫んだ。メレニは両手を自分の両頬に当
てて、しばらく流太郎を見ていたが、一向に衰えない彼の
勃起に感心して両手を両頬から外すと、流太郎のそばに寄
り、彼の長くなったものを優しく握ったのだ。

流太郎は自分の硬直したものに触れたメレニの右手の柔ら
かさに、射精してしまいそうになったが、その流太郎の歯
を食いしばった顔をメレニは見て、

「こんな事で、出したら駄目よ。」

と話すと手を離す。

メレニはエスノに、

「彼のものを元に戻して。」

と催促する。エスノは、

「はい、それでは。」

とパネルの他のボタンを押す。

すると今度は天井から、筋肉ムキムキとした海水パンツ一つの男性が降りてきた。

と、途端に流太郎の勢いよく天井を向いていたものは、だらりと萎えてしまったのだ。

メレニは満足げに、

「これで流太郎はゲイではない事も証明されたわ。ありがとう。」

と白衣の美女検査官エスノに感謝して、その検査は終わったのだった。

あとは下着と服を着た流太郎はメレニに連れられて、区役所の戸籍受付みたいなところへ行き、登録用紙にメレニが火星語で所定の項目を記入すると係にカウンター越しに渡す。

それを受け取った中年男性らしい火星人は、用紙と流太郎を見比べて火星語で、

「ああ、結構です。逞しい男性ですね。検査の結果は未婚男子で性的経験は、なし、となっています。」

メレニは少し驚いて、

「まあ、完璧な童貞なのね。まあ!」

「今時の地球人には珍しいでしょう。それだけに精子の状態も良好のようです。」

「そんな事まで、分かるのかしら。」

「ええ、最初に浴びせた光線から判定できるのですよ。もちろん、地球人女子の判定もできますが、メレニさんは今回は、この地球人男子だけを所有希望なのですね。」

「はい。今のところ、地球人女性まで手に入れられるか、どうか・・・。」

「よろしい。それでは手続きに入ります。」

中年火星人は用紙を機械に入れた。二秒もせずに別の所からプラスチックに似たカードが出てきた。それを役人は手に取ると、メレニに渡して、

「地球人所有証明書です。万一、この地球人が誘拐されでもした場合、あるいは行方不明の場合は、この証明書を近くの捜査機関に提出してください。」

「分かりました、ありがとう。」

メレニは流太郎の所有証明書を手にすると、ズボンのポケットに入れた。火星では女性はスカートは履かない。それは火星の重力の関係だ。つまり、風が吹いてスカートが、

めくれ上がった場合、そのスカートの元に戻る時間は地球の三倍は、かかるためである。

地球では。南極の火山、エレバス山(標高 3794m)が大噴火した。それと同時に周辺の火山も山の頂上から火柱を噴き上げ始めた。

南極を覆う厚い氷は解け始め、海面の水位は上昇した。

それらの海水は、世界の海辺の都市を目指して流れて行った。

ニューヨーク、東京、その他、多くの都市では津波が襲った。

「うわあ、津波だああああっ。」

「逃げろー、というより逃げている。」

この南極の火山爆発は世界中にニュースとして、たちまち広まったので世界の臨海都市の住民、ビジネスマンらは一早く、逃亡して避難していた。

その日の世界の株価は大暴落した。

火星では、パリノ・ユーワクがパソコンに似た画面を見て、

「よおし、大成功だ。地球の康美に電話するか。」

と独り言を云って、携帯電話を手にとると、耳に当てて、それから手を離れた。すると不思議や、不思議!携帯電話はパリノ・ユーワクの耳元で空中に浮いているでは、ないか!!!

これは反重力に、よって浮いているのだ。ちょっと火星でも高価な携帯電話では、あるのだが富裕層のパリノは手にできる代物だ。

空中に停止している携帯電話のボタンを押すと、一つ押すだけで康美に電話は掛けられた。

地球の康美は携帯電話が鳴ったので、手に取って、

「もしもし、パリノさん?」

「おーう、康美か。きのう、日経平均を売っただろう、私に言われた通り。」

「はい、パリノさんの株式取引口座の三百億円分、売りましたけど。」

「今朝から世界中の株価が暴落中だ。日経平均も下がっているはずだが・・・。」

「見てみますわ、パリノさん。」

康美は自室のパソコンを起動させ、未来証券のパリノ名義のオンライン講座を開いた。

株価ボードには日経平均が五万円から四万円に向かって暴落中だ。ストップ安、なのだ。康美は、

「日経平均はストップ安です、パリノさん。」

「それは火星からも見えるよ。買戻しは、まだ先だ。儲けの三割は康美君、君に上げるから。」

「うわあ、それで一生、暮らせます。嬉しいな。」

「何々、これしきはね、序の口という奴さ。今後も、私の株式口座で取引してもらいたい。ついでにFXも。」

「そうだわ、FXも、やってみたかったんです。」

「通貨は、こんな天災では変化は、ないんだが。他の要因では大いに変動する。一ドル50円だろ、今。」

「そうですね、あ、今、49円になりました。」

「ううん。ニューヨークも津波だからね。退避的に円が買われる。」

「でも、パリノさん、何故、南極からの津波が事前に分かったんですか？」

「ははははは。それは、火星から南極の火山を爆発させたのさ。」

ぎょっ、と康美の胸は反応した。

火星から南極の火山を爆発させるとは。なんと恐ろしい火星の科学だろう。それに合わせて日経平均の指数連動ものを売っておけば、いいのだ。特に日本人は臆病だからニューヨーク・ダウより、はるかに株価は下がっていく。

黙ってしまった康美にパリノは、

「なに、僕が爆発させたりは、しないよ。そういう情報が伝わって来た。我が国の機密情報だからね。実は我が国には、株取引省というものが、あって、火星各国の株だけではなく、地球各国の株も口座を数千は開いて持っているのさ。」

なんだか夢の又夢みたいな話だと、康美は思った。

火星のバリノ・ユーワクは会議室めいた部屋で三人に話す。

「既に随分昔から、火星の他の国では主にアメリカ人を地球から連れ去って奴隷として教育し、使っていたりするんだが。他国に干渉しないのが火星の国家間の取り決めで、我が国としては一応、火星に地球人を連れて行くのには同意がある。それは連れて行った後、でもいいんだ。

我々もロボットを開発は、してきたが、やはり、地球の人間にはロボットにない良さ、がある。ロボットに感情を生み出させるのは、我々、火星の文明でも難しかった。というより、いまだ、できていない。それが地球人の奴隷使用として他国では、行われることにより、ロボット以上の使用感を得られるというわけだね。」

ここでバリノは、三人を見渡した。

黒沢は、

「では、私達も奴隷になるので？」

と聞いてみた。するとバリノは暗闇のランプのような笑顔で、

「いや、君達にはビジネスパートナーとして働いてもらう。私は医師として、希望を失った日本人に未来への光明を与えたいんだ。」

と地球の方を見るような謎めいた目をバリノは示現した。

靱山は、

「確かに大格差社会となった日本です。世界の工場は中国から東南アジアを経てインド、それからアフリカへ移っています。日本の工業製品は北アフリカで製造され、地中海を渡ってヨーロッパに輸出されています。日本国内は人口が増えたが、就職氷河期どころか冬眠期のような感じです。ロボットが作業の大部分を奪い、人工知能 AI は株式相場のアナリストを失職させました。

証券各社は不必要なストラテジストなる単に口先で生きて、証券取引をしない無能な輩に人件費を払わずに生き延びようとした。それを行わなかった証券会社は倒産しましたよ。」

黒沢は、うなずくと引き継いで、

「確かに証券会社の解説屋は無能の阿呆ばかりですよ。今ではどの証券会社は人工知能 AI に株式市況の解説を、やらせています。」

と力説した。

バリノは目を日の出のように輝かせると、

「ほお。確かに日本の証券不況は証券会社にいた無能な人間によるものも大きいと、火星の日本経済史学講座では教えている。うん、だが、そんな事は、いい。立体スクリーンで君達に見せたいものが、あるんだ。」

バリノはテーブルに置いてあった、リモコンのようなものを手にすると、スイッチを押す。すると映写スクリーンもない彼らの横に、動物園のようなものが映った。

部屋は地球で映画を見る時のように、暗くしているわけでもない。それなのに、まるで部屋の中に動物園が現れたような現出感がある。

しかも、それは映像には見えず、実物かと思えるような立体感のあるもので、馬が映ったが、それは、そこに馬がいるかのようだ。

だが!地球の三人は自分の目に疑問符をつけた。その馬の顔は、なんと!!人間の顔ではないか!

しかも、四本の足のうち、前足の二本は人間の手をしている。とはいえ、その前足の太さは後ろ脚と同じ馬並みの太さだ。その体重を支えるために進化したのか、人間の手とは言え、人間の手のご二倍はある。

その馬がヒヒーン、と、いなくな代わりに、

「あ、どちらさまか知りませんが、映してもらって、ありがとうございます。」

と人間の顔、それも日本人の顔の口を動かして室内の四人に、話しかけた。

黒沢は心の動揺を制止すると、

「これは一体・・・?!」

とバリノに問いかけた。

バリノは愉快そうに、

「これは日本人の動物園だよ。」

と解答するではないか。続けて、

「もちろん本人の希望と了解のもとに、火星の技術で地球の馬と日本人を合成したのだ。それはウマく、いった、などと洒落にはならんがね。そうそう、なんでも、うまくいくよ。」

靱山は不気味な感慨を持ち、

「人間と馬・・・どういう日本の人でしょう。」

バリノは、

「失業して派遣で働いて、そこも仕事のない男だった。中年前の若者だよ。顔が馬に似ていたのだから、私が、火星でウマイ話があるよ、と誘ったんだ。・・・」

は派遣労働で働いていたが、ある日、派遣の仕事もなくなってしまった。東京の私立大学を出たが、就職できなかった。彼より優れた人工知能は、いくらでも開発されていたのだ。

営業職は、あるにはあったが彼は話下手で、面接に行けば全て不採用となった。

なにがしかの貯金は、どんどん減る。そんな日曜日に真井は埼玉県秩父地方の山の方へ旅に出る。それは何故・・・彼は、とうとう自殺を決意したのだ。

(生きていても仕方ない。親からの仕送りなんて・・・)真井の両親はブラジルのコーヒー農園で、生涯を終わるまで労働する予定だ。それは日本で借金をして、返済できなくなり、ブラジルで奴隷的に働くことで借金をなくしてもらう契約をしたからだ。

こういった借金返済への救済措置は日本では、進んでいる。特に若い女性の借金返済不能者は、むしろ業者によっては歓迎された。そういった女性は、中国の富裕層が女中として使用する。

ブラジルの奴隷的労働より、ましのように見えるが、中国人の女中というのは表向きで、彼女たちは夜の労働もある。それは性労働であるのだ。

それが無しには高額な金額を払ってまで、日本人の若い女性を女中として雇うなど、しないだろう。

真井の妹、は両親の借金のために中国の富裕層に売られた。日本の金融業者は契約書に、静未の署名をさせている。

第六条

雇用主の夜の生活も拒絶せずに、性的要求にも従う事。
これに同意なき場合には、雇用者の通告により、南極基地
の某所にて複数の男性の性の要求に従事させる。

一定の期間、雇用者との夜の性労働が存立していた場合
においては、その拒絶の意思を表示せる場合に於いては、南
極へ送致することは軽減され、遠洋漁業者の性生活に労務
すれば、宜しきを得る。

静未は二十歳の男を知らない処女だった。男を知ってい
る処女、という言葉があるとすれば奇妙なもので、女子大
の三年生の時に親の破産に遭い、金融業者がマンションの
彼女の自室に来た。

「真井静未さんですね？」

玄関のインターフォンが午後の六時に、彼女に呼びかけた。

「はい、そうですけど、どなたですか。」

「こちらは債権の回収をしています。日没金融という会社
です。」

「ええっ？わたし、借金なんて、していませんよ。」

「へへへ。あなたがねー、お嬢さん、してなくても、おたくの御両親が借金をしているんだ。」

「そっ、そうなんですかー。でも、返せば、いいですよ。」

「ふふふふふっ。返してもらっているとか、返せる見込みがある、とかならね、お嬢さん、うちの仕事は、ないんです。」

「という事は、……。」

「ドアを開けてもらいますよ、早く。」

「でも、……。」

「我々と話をしないなら、あなたの両親は全身を臓器提供して死ぬことに、なるんだけど。」

静未は大きな胸の中を動転させて、

「今、開けますから。」

と答えると、玄関を開けた。

日没金融の男はサングラスをしていた。彼の目に映った静未は、均整が取れて豊かな胸のふくらみと、くびれた腰、少しミニの赤いスカートの大きな横の広がり、肉感的で濡

れているような赤い唇、男を蠱惑するような大きな瞳、肩まである長い黒髪を見た。

(こいつは、いけるぜ。上玉、というより超玉だ。おれが先に、いただきたいが商品に傷をつけられねえからなー。紳士的に説得しよう。)

静未は日没金融の男の話聞き、両親に電話して、その話が本当なのを知ると、自分の身を売る決意をした。

は妹の静未から携帯電話で、

「お兄ちゃん、わたし、中国の金持ちに売られる事になったの。」

と話を受けた。

「えっ、どうしてだあ。」

「だって、お父さんが返せない借金が、あるんですもの。」

「それで、お前の学費は今まで・・・」

「わたし、キャバクラとモデルをやって稼いでいたの。でもね、体は売らなかったわ。芸能事務所と違って、モデルの事務所は枕で営業は、しないから。」

「そうだったのか。それなのに・・・中国の金持ちに売られるって、体まで要求されるんだろ。」

「そうみたい。でも、仕方がない・・・。」

兄の新太は超絶句した。

「すまん。俺も、何とかしてやりたいけど・・・。」

「いいのよ。どうせ、いずれ、わたしも男に抱かれるんですもの。」

電話は切断した。

その日、真井新太は自殺を決断したのだ。

埼玉の山の中ともなれば、人通りもなく、木の枝にロープを巻いて首を吊ろうと新太は考えたのだ。

夕焼けの空が赤い。新太は牧歌的風景の秩父地方を見下ろす山の中腹辺りの大木に、ロープを巻き付け、首を入れた。

その時に!

「待てよっ!」

と男の声がした。新太は、ぶら下がるのを止めて、

(誰だろう?)と、周囲を見渡したが、誰もいない。

と、突然、目の前に直径二十メートルほどのアダムスキー型円盤が、キラキラと輝きを放って出現した。それは停止すると、地面から三十センチのところに浮いている。円盤前部の扉が開いた。それは、そこに扉があったようには見えなかった。

中から日焼けした医者のような人物が、新太の前に少し重そうに歩いて来ると、

「やあ。驚かなくてもいい、といったところで驚くのが当たり前だよな。私はね、火星から来たんだよ。冗談では、ないんだ。地球の重力は火星の三倍は、あるからね。まあ、そのための筋力トレーニングもしているんだがね。地球を歩く時などの。で、だな。とにかく自殺は、やめた方が、いい。」

火星からの男性らしき人物は、新太の首からロープの輪を外すと、

「自殺したかった理由は、円盤内で聞こう。さあ、おいで。」

新太は有難いやら、衝撃的な驚愕などで心を振幅させつつ、その火星人の後に、ついて行った。

新太が円盤内に乗ると、扉は閉まり、そこには扉があったとは見えない灰色の壁が、あるだけだった。

テーブルと椅子が多人数、座れるものが見えたが、なんと！椅子もテーブルも、その脚部の先端は円盤の床面に接していない。つまり、二十センチは浮いているのだ。

火星人はニヤリと笑みを湖水の、さざ波のように浮かべて、

「まあ、かけたまえ。浮いた椅子も初めて見るだろう？」

「ええ、それでは、お邪魔します。」

と答えて新太は火星人の前に腰かけた。テーブルを挟んで、向かい合ったのだ。火星人は先に椅子に座っていた。

円盤の天井から盆に載せられたコップと菓子皿が、スルスルスル、と降りてきてテーブルに載せられると、それを支えていた金属製の手のようなものは上に上がり、天井の中に消える。

新太は、うわあ、夢の中にいるのか、とあってしまう。しかし、夢でないのは目の前の火星人が明確な日本語で、

「私の名前はバリノ・ユーワク。日本語風に発音している。火星語では君の耳には聞き取れないからね。さっき、円盤

内の拡大カメラで地上を見ていた時に、君が自殺しようとしているのを見たんだ。」

と話しかけてくるではないか。

新太は感謝の気持ちで胸を充たして、

「ありがとう、ございました。でも、状況てのは変わらないんですよ。」

「ふむふむ。これを頭につけてくれ。」

バリノはヘッドフォンのようなものを、新太に手渡した。

「ええ、つけます。なんですか、これ？」

と問いつつも、新太は頭に、それを装着した。

「これは、うん。今、見てみるよ。」

バリノはテーブルの上の閉じたノートパソコンのようものを、開いて起動させた。

そして、その画面を見ているバリノは、

「おお、分かったぞ。君の自殺しようとした原因が。」

と落ち着き払っている。

新太は、

「何故、分かったんですか、バリノさん。」

「いやね、君の頭につけているものは、君の脳内思考を、この地球のパソコンに似たものに電波のような形で転送する。

それで、ここには日本語で、妹は、もうだめだし、自殺したい、という君の考えが出て来たんだ。」

「へえええ?なんという機械でしょう。確かに地球上には、ありませんよ、そんなもの。円盤の中に、僕はいるし、火星の超科学ですか、これは?」

「うん、これはまだ、昔の発明品なんだ。今は、もっと、すごいのが出ているよ。医師の私にも手が出ないものも、ある。それにね、地球でも麻酔薬なんてのは、医者にはしか扱えないように、使用許可のいる機械もある。そうしないと火星にも稀に、悪い奴が、いるしね。

で、という事は、うう?妹さんは、売られるのか?金持ちの中国人に?」

「ズバット当たりです。今晚辺り、抱かれるんじゃないかと思えます。妹は肌も白人並みに白いのに、海水浴が好きで、割と日焼けしています。秋には白くなるんですけど、それでビキニを付けたところだけが陽に焼けずに白いんですよ。」

「ほ、ほ。いやに詳しいな。」

「ええ、妹が中学一年生まで風呂と一緒に時々、入ってやったものですから。」

「ははあ、そうだろうな。何、女子大の三年生か。中二ぐらいから、生理が始まるものね。それで恥ずかしくなって、兄の君にも裸を見せなくなったんだな。」

「そうなんです、って、妹に生理が始まったのか、なんて聞けませんけど。それに十八までに妹の胸は、大きくなっていて、近くを僕が家の中で通っても、ぷるん、ぷるんと胸を揺らせて妹が通り過ぎたりしました。

それに、お尻も大きくて、それを左右に揺らせて歩くんですよ。妹は男と、付き合った事がなくて。それで。」

「処女だというのかね。」

「ええ、多分、そうでしょう。高校三年の夏の終わり、つまり夏休みが終わって学校に行った帰りに、自動車が妹に、ついてきて、車の中から、

『おい、一緒に乗らないかー。』

と暴走族風の若い男に声を掛けられたそうです。妹は走って家に帰ると、ぼくに、その事を話して、

「お兄ちゃん、一緒に帰ってよー。」

と頼んだんです。

妹は部活動をしていたし、僕は部活動はしないで家に帰っていましたが、時間を合わせて妹が校門を出たところで待ってやって、一緒に帰っていたんです。」

「なるほどねー、それで、処女で、いられたのかなー、おお、妹さんの顔と全身が、もちろん大学生の姿で、この火星のパソコンのパネルに映っているよ。ほれ。」

バリノは、画面を新太の方に向けた。

そこには妹のが笑顔で自分に手を振っているではないか。つまり動画だ。